



第39回 全日本中学生水の作文コンクール  
和歌山県入賞作品集

五段の滝

表紙の写真『五段の滝』（和歌山県高野町 高野山より）

城ヶ森山より湧き出し湯川川に合流するまで全く人跡に触れない神秘的な清流に掛かる滝です。

天狗の水切りや名刀の磨ぎ水としての伝承からも、水の清浄さをうかがい知ることができます。

## あ い さ つ

水は、あらゆる生命の根源であり、私たちの暮らしや、農業、工業などの産業活動を支える限りある貴重な資源です。一方、近年では、世界的に渇水、洪水が頻発し、水利用の安定性や安全で良質な水資源の確保が重要な課題となっています。

こうした中、平成二十六年七月に水循環基本法が施行され、水を私たち共有の財産と位置づけるとともに、国民の皆様に、健全な水循環の重要性についての理解を深めていただくため、毎年八月一日を「水の日」と定め、様々な関連行事が行われています。

この一環として、和歌山県では、中学生を対象に、昭和五十四年から「全日本中学生水の作文コンクール」を実施しており、本年は、一〇八八編の応募をいただきました。

いずれの作品も、「水について考える」というテーマにふさわしく、つい忘れがちな水の大切さ、有り難さについて考えさせられる作品で、水を大切にしようという思いがよく伝わってまいりました。

このたび、入賞作品十八編を作品集にまとめましたので、ご家庭や学校でご活用いただき、水についての関心をさらに高めていただくことを願っています。

最後に、本コンクールに応募された中学生の皆さんと、ご担当いただいた先生方に厚くお礼申し上げます。

平成二十九年七月二十七日

和歌山県企画部長 高瀬 一郎

もくじ

優秀賞

水害から学ぶ

和歌山県立田辺中学校

一年

井本 彩音  
・  
・  
1

水の命を救う

和歌山県立向陽中学校

二年

内川 璃乃  
・  
・  
3

小さな生き物のために

和歌山県立向陽中学校

二年

柴田 啓介  
・  
・  
5

入選

大切な資源「水」を守るために

和歌山県立田辺中学校

二年

大石 愛華  
・  
・  
7

まずは自分からできることを

和歌山県立向陽中学校

二年

柿本 夢果  
・  
・  
8

私達に必要なきれいな水

和歌山県立田辺中学校

一年

家門 美紅  
・  
・  
9

水が与えてくれたもの

開智中学校

一年

栗阪 典位  
・  
・  
10

あの水と蛍をもう一度

和歌山県立向陽中学校

二年

田井 萌々華  
・  
・  
11

命と共に

近畿大学附属新宮中学校

二年

貝岐 好香

・  
・  
・

1 2

「水」の悪夢、そして希望

和歌山県立田辺中学校

二年

倉山 未羽

・  
・  
・

1 3

生命の水

開智中学校

一年

谷口 寛汰

・  
・  
・

1 4

水と正面から向き合う

和歌山県立向陽中学校

二年

津村 忠明

・  
・  
・

1 5

水が私たちに与えてくれるもの

近畿大学附属和歌山中学校

三年

富安 南名

・  
・  
・

1 6

きれいにしたいという思い

和歌山県立向陽中学校

二年

中碯 心優

・  
・  
・

1 7

あの日見た景色から

和歌山県立向陽中学校

二年

面谷 美咲

・  
・  
・

1 8

家族との「節水大作戦」

近畿大学附属和歌山中学校

二年

濱野 悠奈

・  
・  
・

1 9

曲川の恩恵

田辺市立本宮中学校

二年

松井 深山

・  
・  
・

2 0

コウノトリが教えてくれたこと

和歌山県立向陽中学校

二年

三嶋 瞭秀

・  
・  
・

2 1

(掲載順序は五十音順です。)

## 優 秀 賞

# 水害から学ぶ

和歌山県立田辺中学校 一年

いもと あやね  
井本 彩音

記す碑を見つけました。

社会見学で田辺市水道事業所に行った時に、田辺市にダムがあるのか職員の方に尋ねたところ、ダムはないとおっしゃっていました。ダムがなければ、大雨が降った時水害が起こりやすくなるのではと不安に思い調べてみたところ、現在は堤防やポンプ場が整備され、かなり水害は少なくなっているそうです。

小学六年生の修学旅行で、岐阜県にある海津市歴史民俗資料館に行きました。海津市には、三つの川に囲まれた海面よりも低い高須輪中という土地があります。輪中で暮らす人々は、盛り土をして石垣で固めた上に家を建てたり、水屋を家よりも高い所に建て、水害の時の避難場所として暮らしたりなど、様々な工夫をしていたことがわかりました。

私の家の近くにある田辺市民総合センター前の会津児童公園には、明治大水害記念碑が建てられています。私は小学四年生の時に田辺市に引っ越ししてきて、初めて友達と会津児童公園に行った時、その碑が気になっていました。後日、その碑のことを知りたくて公園に行くと、碑には大水害の時に記録した最高水位が記されていました。最高水位が自分の身長よりも高く、家の近く

でこれほどの水位を記録した大水害があったと思うと恐ろしくなりました。その後、別の場所でもこの大水害の時の最高水位を

資料館の庭には「堀田」という田がありました。輪中の土地は水はけが悪いので、田の一部を掘って土を積み上げ、そこに稲を植えていました。掘った部分には船で移動できるほどの量の水がたまるので、そこを水路にし、田植えや稲刈りの時には船を使って作業をしたことを知り、すべて陸地で作業をするよりも大変だったのではないかと思いました。

輪中では何度も治水工事が行われ、明治三十六年に排水機がおかれるまでは、河川の水位が高くなった時には排水することがで

きなかつたそうです。

私は輪中での人々の工夫に感心し、治水工事や排水機、ポンプ場のおかげで安心して暮らすことができることに気づかされました。

平成二十三年の台風十二号により、紀伊半島大水害が発生し、田辺市内にも多くの被害をもたらしました。当時私は和歌山市内に住んでいて、被害はほとんどなかつたのですが、田辺市内に住んでいた祖父母の家が床下浸水したと聞いた母は、電車で田辺市内に向かいました。途中、電車が不通になっていた区間はバスでの代行運転になっていて、バスの窓から見た川は水かさが増し、濁流になり多くの木々が流されていたと母から聞きました。母が祖父母の家に着いた時には水が引いていて、祖父母たちは無事だったそうです。

最近、田辺市熊野で「若葉まつり」が七年ぶりに復活するという新聞記事を読みました。記事には、熊野地区では紀伊半島大水害での災害復旧工事が今も続いているなかで、地域の活性化を願って「若葉まつり」を開くとありました。私は、紀伊半島大水害の被害の大きさを改めて感じ、一日も早く復旧作業が終わり、熊野地区に多くの観光客が来てほしいと思いました。

数日後、「若葉まつり」に大勢の人が来たことを伝える新聞記

事を見つけました。主催した方は地域の活性化につながったとおっしゃっていたそうで、とても安心しました。

私にできる水害防止策は、雨水が流れる下水道や川をきれいにして流れをよくすること、自然のダムの役割をする山間部の木を守ることでいいです。それでも水害はいつ発生するかわかりません。これからは必要以上に水害におびえず、水害が起こりそうだと思うたら防災情報をいち早く得て、早めに避難をすることを心がけようと思いました。これまで水害に向き合ってきた先人たちの苦労や努力、知恵や工夫の積み重ねを忘れないように生き、そしてそれを伝えていきたいです。

## 優 秀 賞

# 水の命を救う

和歌山県立向陽中学校 二年

うちかわ  
内川 璃乃

色々な種の中から私はいちごを選んだ。真っ白な生クリームの上に真っ赤ないちごが並んでいるショートケーキを見て満点の笑みをこぼす子供の顔が浮かんだ。そして私はいちごを育て始めた。それから種を手に取り土に植える。元気に育つようにと思い込む。ホースの蛇口をひねり水をやる。飛び散った水滴が日光を浴びて光り輝く。それはとてもきれいな光景だった。

「大きい実になったねえ。」大きく真っ赤ないちごの実を見て思わず私も感激の声を上げる。夕日のように赤いその実の形はいびつながらも我ながら満足できるものだった。

十回目の冬が来た日、私は祖母の一声に耳を向けた。「あんたも何か育ててみる？」ただ、私は祖母が育てた花がきれいだなと思っただけで、自分が育てるなんて思っていなかった。しかし、自分で命を育くんでみたいと思った。それが物事の始まりだった。後日、私は祖母が持っている種の中から育てたいものを選んだ。

数日後、一つの種が芽を出した。その芽は小さかったが、そこに大きな生命力を感じた。あんなに小さかった種が今こうして芽を出している。普通のことだが、それがとてもすごいことのように感じた。「あんなに小さかった種が芽を出すなんてすごいね。」思わずつぶやく。近くにいた祖母が「そうだね。でも、この芽も私たちが水に生かされているんだよ。」祖母がつづける。「私たちが普段食べている食べ物ほとんどがこのいちごのように水でできているんだよ。だから私たち人間が水を大切にしなければならぬのよ。」私はこの話を聞いて改めて水の大切さについて知らされた。

それから、私はいちごを大切に育てた。水と水がつなぐ命の重さについて、とても考えさせられた体験になった。

そして、桜の花びらが舞い散った頃、花壇に紅緋の実がなった。形はいびつでとてもほめられるような出来ではなかったが、私は

それでも嬉しかった。自分で命を育めたこと自体、とても嬉しかった。私の中で水を大切にしようという意志が高まった出来事になった。

このような体験から、私は水の大切さについて知った。この地球で命を持っている全てには水との関わりがある。だからこそ私たち人間が水を大切にしなければならない。そのためにできることはたくさんある。

一つは、風呂の場面だ。例えば風呂の残り湯を洗濯に使ったり、使っていないときはシャワーを止めたり、湯船にお湯を入れすぎないように注意したりなどがある。二つ目は、食器洗いの場面だ。食器についた汚れが落としやすいようにあらかじめおいた水につけておいたり、頑固な汚れは水を使うのではなく拭き取っておくなどがある。これらは私の家庭で実際にしていることである。家ではこれが当たり前となっており、節水に積極的に取り組んでいる。

他にも私たちがすべき節水方法はたくさんある。私はそれらを今後の生活に取り入れていきたいと思う。確かに地球は『水の惑星』といわれる程たくさんの水がある。だが、生活に利用可能な水はとても少ない量だ。そのことを頭に入れて、水をどう使うのが正しいのか考え直すことが大切なのだ。日本では水道の蛇口を

ひねると水が出るというのは当たり前のことだが、世界を見ればそれが当たり前ではない人がたくさんいる。それを理解し、一人でも多くの人に節水に協力してもらいたい。人間や動物、植物に宿っている水の命を一つでも多く救うには、今自分が水をどう使うべきか考えることが必要なのである。

## 優 秀 賞

# 小さな生き物のために

和歌山県立向陽中学校 二年

しばた けいすけ  
柴田 啓介

に入ると冷たく、水はどこまでも透き通っている。岩の間にいるアユの水によってゆれる尾びれの動きも美しいものだ。セミの声に、そよ風によって落ちる葉。終わることなく続く川の音と、深緑色の山々の上に存在する透き通る空と雲。「自然」を感じる場所だ。

私が水のきれいさについて深く考えたのもこの場所での事だった。小二の夏、私は兄と共に自由研究として指標生物による水質調査をした。バケツの中に水温計と網を持って川辺の石の上を歩きながら探した。普段なら川に飛び込むので気付かなかったが、思っていたよりも生き物は隠れていた。帰って調べると、ホタルの幼虫やサワガニ、ヘビトンボ、ナガレトビゲラと呼ばれる生物で、「きれいな水」に分類されるものだった。和歌山市内ではこんな生物を目にする事はなく、川の中に入ったこと自体も少ないと思う。手の指に乗るような小さな生き物が生きていくためにも、あの雄大な自然がつくる水がなくてはならないものだと思ったのを記憶している。

いつものように自動販売機のボタンを押して、「天然水」を買った。いつもと変わらない行動。キャップをまわし、ペットボトルをにぎり、水を喉に流し込んだ。日本でも水は買う時代になっている。アルプスや天然水などと呼ばれ、コマーシャルでもよく目にするが、日本にはまだ多く残っている。きれいな水を産む自然が。祖母の家は和歌山県田辺市で、どこを見ても緑のおいしげった山が見えるところにある。セミの声が町にひびきはじめると、浮輪を右手にゴーグルを頭につけて川に遊びに行くのだ。夏とはいえ、中

小学校の頃、社会見学として浄水場に行ったことがある。一番驚いたのは敷地面積の広さ。私の家から、私の学校から、周りの建物の排水がこの広い場所に全て集まっているということ。想像できないような話だった。私達が踏んでいる地面の下には排水管や水道管がうまっている。浄水場や管がしっかり整備されているなら川や海が汚れる心配もなく安心だ、と思ったのを覚えている。

私は本当に自然のため、あの透き通る水のため、あの生物のために、何かをしているのだろうか。食事に歯みがき、そしてトイレにお風呂。世の中に水はあふれている。風呂の残り湯を使って洗濯したり、シャワーや蛇口をこまめに止めているのか。歯みがきのとくにコップを使っているか。一日を振り返ると全然出来ていない事に気が付いた。なぜ出来ていないのか。それは「水」についての意識がないからだと思う。水は「空気」のような存在だ。私達の周りにあふれすぎて誰にも思われていない。でもそこに存在しなければいけない、思われるべき存在。それが「水」だと思う。

日本で水は、買うモノ。しかしそんな水が産まれる場所は、私たちの周りにまだ多く残っていた。環境についてより考えられるようになった今、そうした場所を増やしていかなければならない。「天然水」が売れているということは、きれいな水が減っているとも、きれいな水が注目されているともいえると思う。だからこそ、浄水場や排水管が整備されているから、県が、国が、社会がどうにかしてくれると思っただけではない。自分がするという気持ちが必要なのだ。自分自身が少しだけ蛇口の水を止めてみる、残り湯で洗濯するのを週二回だけやってみる。そんな小さな行動をしていき、家族にも伝えていく。そしてまた誰かへと伝わり、次の世代にも小さな行動を続けていく。

あの流れる水の音、深緑の山々と透き通る水色の空。あれがいつまでも続くよう。そしてあの小さな生き物たちのために…。

## 大切な資源「水」を守るために

和歌山県立田辺中学校 二年 大石 愛華 おおいし あいか

今、私はコップに注がれたお茶を飲んでいきます。氷も入っています。重労働や運動をした後の冷たいお茶をとてもおいしいですよ。おいしいお茶は、水にお茶の葉っぱを入れて作ります。氷は、水を凍らせて作ります。今私が飲んだものは、元はと言えば、水から作られたものなのです。

世界には、水が豊富にあると思っていませんか。確かに地球は『水の惑星』と呼ばれる程ですから、水が豊富なんだろうのは、おかしくはありません。そして、宇宙から見た地球は青く、海が地球の表面の十分の七をおおっているのです。でも私は、水が豊富なのは、ごく一部の国や都市だけなのだと考えています。

私たちの住む『和歌山県』は、海・山・川に囲まれた、水が豊富な地域です。田舎の水道水は、おいしく、清潔であると思います。でも、都会の方へ行くと、水道水は、あまりおいしくありません。その原因は、家庭の汚染水だと思います。食器洗いのときに排水口へ、水と一緒に流れていく油や洗剤が、川を汚染しているのです。だから、油が多かついたお皿は、先にティッシュなどでふいてから洗うなどの工夫をすればいいと思います。人口が増加し、水が不足している発展途上国。水くみが子どもたちの仕事になり、まともに学校に行けないというのが現状です。少なく、清潔でない水を飲まなければいけない環境で育った人は、きっと苦しい思いをしていると思います。

それに比べて私たちは、本当に楽な生活をしているんだと改めて実感しました。身近な所に水道があり、清潔な水を飲んだり使ったりできるので

す。水の恵まれた所に生まれて良かったと思います。私たちが気をつけなければならぬ『節水』。水のむだ使いを防ぐだけでなく、発展途上国の人たちに協力していることにもなるので、節水を心がけるようにしたいです。

水は私たち生命体にとって、とても大切なものです。

人の体の六〇%を、水が占めています。食料は、二〜三週間程は、食べなくても生きていけますが、水は、数日程で、力つきてしまいます。また、水を飲まない、脱水症状になったり熱中症になったりして、危険です。

植物は、水がないと枯れてしまったり、動物は、水を飲まないと死んでしまいます。「のどがかわく」ということは、体の中で水が不足しているということなので、水はこまめに飲むようにしたいです。

「水」は、大切な資源です。日本は水に恵まれているけれど、世界には水が不足している地域が多くなってきました。水がなくて苦しんでいる人のためにも、環境のためにも、節水を心がけるようにしたいです。

毎日のように飲むお茶にもっと感謝したいです。そして、水を大事に使っていききたいです。

## まずは自分からできることを

和歌山県立向陽中学校 二年 柿本 夢果 かきもと ゆめか

「こっち、こっち。やっと見つけた。」私は祖父と近くの山の小川へ来た。夏の暑い日差しの中で、私と祖父の汗が光る。私は靴を脱ぎ、足の先を少しずつ、小川の中に入れた。すると、足に凹凸の石が当たった。私はそつと岩に近づき、手を伸ばす。私はかきを掴み、手の平に乗せた。小さなかには、私の手の平の中で動き回った。祖父と私の笑い声と、小川の水の音が辺りに響きわたる。すると、祖父が「生き物がたくさんいて、きれいな小川をずっと残していきたいなあ。」とつぶやいた。当時、七歳だった私は「そうだね。」とだけ言った。

それから、四年がたち、私は小学五年生になった。私の小学校では五年生になると、田んぼについて学ぶ。アイガモを孵化させ、田んぼに放した。アイガモたちは田んぼの中の微生物を食べる。そのアイガモのエサとなる微生物は水の中で生活している。その水は近くの用水路の透明の水からきている。このようにきれいな水がないと、微生物はいなくなり、アイガモのエサもなくなってしまう。そして、アイガモによっての稲ができなくなる。つまり、命は水によってつながっているのだ。水は命を生み出す、大切な資源なのだ。水の大切さに改めて気づいた。

私は、この時、祖父の言葉を思い出した。たくさん生き物が小川に住むためには、きれいな水を守っていかなくてはならない。

しかし、「水を守る」ということはどういうことなのだろう。それは、水のありがたさについての理解が大切だと思う。水は私たちの命の恵みである。私たち人間、そして、他の生物も、水がないと生きていけない。人間の体は約七〇パーセントが水であるということを知ることがある。それ

だけ、私たちにとって水はかかせないものなのだ。また、私たちの生活にもかかせないものだ。例えば、朝起きて、歯を磨くとき、顔を洗うとき、食器を洗うとき、シャワーを浴びるとき、そして、トイレのときも。考えてみれば、たくさん思いつく。身近なところに、水は使われている。

そのように、大切な水を守っていくために私たちができることもたくさんある。水にも限りがある。そのため、私たちは、水の使用について意識していくべきだと思う。地球に住んでいる人として、水という資源のことを考えていかなければならない。例えば、世界の一人ひとりが手を洗うときに、一回ずつ止めて使えば、無駄な水が少なくなるだろう。「誰かがやってくれるから、自分は節水をやらなくてもいい」という考えはいけない。「自分も」という考えが大切だと思う。

「水」を大切にすることは命を守ること。私たち一人ひとりがしている、小さな取り組みが未来へと続いていくのだ。水を失ってからでは遅い。だから、今、私たちが、水のためにできることをやっていくことが必要なのではないだろうか。みんなが水を意識する力が、大きな力となり、水を守るということにつながるだろう。まずは、自分からできることから。それが、大きな第一歩となるのだ。今は、水を買う時代。私たちにとって水は貴重で、最も大切なものなのだ。私たちが、この青く美しい地球を守っていくのだ。私たちの小さな一つの水のための行動が命をつなげるんだと思う。一人の力が小さなものでも、世界の全員が水の心を心がけたら、世界の水は大きく変わるだろう。

## 私達に必要なきれいな水

和歌山県立田辺中学校 一年 家門 かもん 美紅 みく

「この田んぼで稲を植えていたんだよ。」

その祖父の言葉が私には疑問に思えた。

「なぜ、今は植えていないの。」

瞬時に出了た私の言葉に、祖父は元気がなさそうな顔つきでその田んぼを目の前にして話してくれた。それは、毎年この田んぼに稲を植えていたけれど、ある年に田んぼから約五百メートルほど離れた山の上の方に、化学薬品を取り扱う工場などが次々とできてしまったという事だった。そこから流れてくる水を使って稲を育てることになる。健康に害が及ぶかもしれない。そう考えた祖父は、どうすることもできず、植えないようにしたらいいのだ。私はこの話を聞いて、小学校五年生の時に習った公害の事を思い出した。四大公害の一つ、イタイイタイ病だ。それは、未処理廃水より作られた米などで、多くの人が害を受けた。すごくこの事件と似ているなと思った。

普段、蛇口をひねるだけで水が出てくるのが当たり前だけれど、この水が出てくるまでに、一滴一滴が浄水場で整備されている。工場の水がそのまま流れてくると、当然稲に影響が出るに違いない。私は普段、きれいで害のない水を使うのが当たり前前の生活になっているので、水について考えてみた。

土壌汚染は、見た目だけではほとんどわからない。一見、普通の土地と何も変わらないことが多いので、家を建てて住んだり、田んぼや畑をおこして農作物を育てて食べたり、その地下水を飲料用や農業用に使ったりすることがある。祖父が稲を植えなかつた気持ちがよくわかる。植物は土

壤の水分や栄養分を取り込んで育つ。その時に、汚染物質も一緒に吸収し、蓄積しながら成長していく。そうして収穫されたお米や野菜、果物を食べ続けると、体にも有害な汚染物質がたまって、健康に害を及ぼすことになる。また、汚染された飲料水を飲み続けることでも同じことになる。

このように、汚染された水で害を受けるのであれば、その水をきれいな水にしてから流すということはできないのかと私は思った。そこで、家の中を探すと、浄化槽を見つけた。浄化槽は、家の中から出る生活排水を微生物のはたらきで浄化する装置だ。これを利用すれば、下水道に流す前に汚れを取り除くことができる。

そして、家の中で何か取り組みをしていないか見てみると、揚げ物をした油を流していないという取り組みがあった。揚げ物をした後の残った小麦粉やパン粉に油を吸わして、燃えるゴミに捨てる。また、油を使わず料理をした日には、毛糸で編んだスポンジで汚れを落とすようにしている。台所のシンクの三角コーナーに食品くずを入れて流れないようにしている。トイレでは、こまめに掃除をして、強力な洗剤を使わないようにしていた。お風呂場では、湯船に入浴剤を入れる回数を減らしたり、小学校で重曹やクエン酸で作った、環境に良い入浴剤を使ったりした。また、シャンプーやリンス、ボディーソープを必要以上に使わないようにもしている。このように、汚れた水を流されない工夫は色々あるので日常生活で習慣にしていきたい。

祖父が話してくれた話は、今も心の中にある。私達が生活する中で、きれいな水が必要だ。そのために、汚さない工夫をしていきたい。そして、水の大切さに気付かせ、私を変えてくれた祖父に感謝したい。

## 水が与えてくれたもの

開智中学校 一年 栗阪 典位

くりさか てんい

「凄い、めっちゃ美味しい！」

弾んだ声が飛び交った。宿泊研修で滋賀県の針江生水の郷を見学した際、湧き水を飲ませて頂いたのである。透き通る仄かに甘い湧き水に、僕は感銘を受けた。案内して下さっている女性が「百五十年の星霜を経て此処にやってきているんだよ。」と教えてくださると、その場はより一層盛り上がった。そして帰りも感銘を受けた。バスの窓から白い霧の立ち込む琵琶湖に日が射し、見事な激瀧が見られたからだ。僕はその光景にうっとりとしていた。そしてまた、和歌山県の高野山に遠足に行つたときも感銘を受けた。登山道で疲れが絶頂！という時に、川の流れが見え、川のせせらぎが聴こえたのだ。幻想的な水の流線型、神秘的な川のせせらぎ。それを感じただけで、疲労感が癒えた様に思えた。正に感慨無量だった。水は喉に潤いをもたらすだけでなく、心にも潤いをもたらしてくれるのだなあと思った。

そんな中、入試でお世話になった先生と会って話をしたときに、吃驚する様なことを聞いた。それは「外国では、水に対するルールが凄く厳しいねんな。お風呂の時は水を桶みたいなやつにに入れてからその水だけを使わんとあかんし。それもトイレに関しては有料やし。それで一番可笑しいなあと思ったことは水よりコーラの方が安かったことや。」ということだった。聞いたとき、あまり意識することのない話だったからか、というよりは、水脈が豊富で水に困ることが殆ど無い「日本」に住んでいるからか、違和感を覚えた。普段の生活の中で、水道の蛇口を捻るだけで綺麗で安全な水を飲んだり、使ったりすることができる。そのことを「当たり前」と無意

識に思っている自分がいるからだ。

僕が小学生だった時にも、降水量が少なく、琵琶湖の水位が下がり、取水制限が行われた年には、「節水をしましょう」と呼び掛けられたこともあった。その時には「節水しなければ。」と気を付けたことはあったが、暫くすると「節水しましょう」と呼び掛けられることも無くなり、意識することも無くなってしまった。今思えば、無意識のうちに、水があることが「当たり前」という思考が、危機感を鈍らせているかもしれない。

水脈が多く、地下水源が豊富だと言われている日本でも、浄水場や下水処理場の設備を整え、国民に安全且つ継続的に供給できるように努力している。即ちそれは、資源が枯渇するかもしれない可能性に備えるということに繋がっているのだと思う。

小学生の頃に、テレビで水資源が少なく水不足で苦しむ国の人々の話を聞いたことがある。それは数時間もかけて遙か遠い川や沼地等の水のある場所に、学校に行く時間さえも費やし、水を汲みに行く子どもたちがいるという話であった。僕は、この様な不自由で大変な生活をしている方々もいるということに絶対忘れてはならないと思った。叶うことならば、世界各国の水不足で苦しんでいる人達の為に、何らかの手助けをできる事業に携わりたいと思っている。

ただ、今の僕たちができることは、常に節水を心掛け、河川や海を汚すことなく努めることである。最低限の一步だが、常日頃から意識し、継続していくことが未来を担う僕たちの役割だと思う。

生きる為だけの水ではなく、水と触れ合うことによって、心をも潤し、リフレッシュすることを「どんな時でも」「どこに居ても」そして「誰もが」できるような世界にする為に。

## あの水と蛍をもう一度

和歌山県立向陽中学校 二年 田井 萌々華

「すごい、きれい！」それは私が見聞きして最初に思った事でした。数年前の六月、私は家族と共に家から数十分くらいの所にあるきれいな山と川が見える所に行きました。そこから、私達はほとんど山の奥の方へ進んで行きました。最初は、暗闇の中に細い山道とたくさん木、星が少し見える程度でした。その後、もつと進んで行くと、今まで見たことのないような素晴らしい景色が私達を待っていました。そこには、きれいな川に集まったり、感動している人々の間を華麗に通っていく、たくさんさんの蛍がいました。その景色を見た時には、空は真っ暗になっており、月も出て、見える星の数は先ほどとは比べものにならないくらい量になっていました。そのため、きれいな主役の蛍達に加えて、真っ暗な空にはきらびやかな星の天井、月明かりに照らされ、光り輝く川はきれいな水のじゅうたんの様でした。そして、山の木や草がたくさんある方向からは、山に住んでいる虫達が、きれいな音色を奏でていました。そのきれいな音色は、今でも私の耳からは離れることはありませんでした。そして、あの素晴らしい光景も私の頭にやきついており、今でも頭の中に残り続けています。私達家族は、この素晴らしい感動して、またこの光景に出会いたいと思います。それから、蛍を見に行く事は、私達の恒例行事となりました。ある年は、蛍と一緒に写真に写り、ある年には葉に止まっていた蛍が私の手の甲に飛び移ってきて、それが光り輝く宝石の様に感じられました。

ある年も、蛍を見るためにあの山へ行きました。しかし、今回は様子が

変でした。何故か、蛍を見に来たはずの人達が次々と帰っていくのを見ました。私はどうして皆が帰っていくのかが不思議でした。私達は皆が帰っていくのを見てとりあえず帰ろうという話になりました。しかし、奥がどうなっているのかがすごく気になっていたので、見に行ってみることにしました。そして、私達は山の奥に進み、いつもたくさん蛍がいる場所まで行きました。しかし、蛍は一匹も飛んでいませんでした。その時はもう空が真っ暗で、何故か突然姿を消してしまっただけは知る事ができませんでした。私は蛍がいなかった時の光景を鮮明に覚えています。それは、まるで主役が消えた劇の舞台のように見えました。私は、蛍がいなくなつて残念だと思うと同時に蛍がいなくなった理由が気になりました。そして、次の日にまた見に行ってみることにしました。次の日、私は蛍が見えた所に向かいました。私は、その川のあり様を見て驚きました。それは、川が少し濁ってしまったっており、川には空のペットボトルやお菓子の袋が捨てられていました。それを見て、私は蛍がいなくなってしまったのも当然だと納得しました。それから蛍が姿を現すことは、一度もありませんでした。これは人間が川を汚してしまったことから招いてしまった結果だと思えます。人間にとっても蛍にとっても生きていくうえで大切な水を汚してしまうのはだめだと思います。私は、またあの素晴らしい光景を見たいと思つています。あの川にまたたくさん蛍が集まってくれたいと嬉しいですし、蛍のためにも蛍が住める環境を増やした方が良くとも思っています。私達人間は大切な水を汚してしまっているので、きれいに戻さないといけないと思えます。そのために、ゴミは決められた所に捨てるなど簡単な事でもしないとイケないと思えました。そして、いつかまたあの光景を見たいです。

## 命と共に

近畿大学附属新宮中学校 二年 貝岐 好香

かいはみ このか

私の住む和歌山県那智勝浦町には、世界遺産として知られる「那智の滝」がある。この滝は、日本一の落差を誇る。さらに、華厳滝・袋田の滝と共に日本三名瀑とされている。一般に那智の滝と言われるのが一の滝で、その上に四十七の滝があると言い伝えられている。いつも滝壺周辺には、思わず感嘆の声を漏らす観光客であふれ返っている。観光客だけではない。近隣に住む私たちも、毎回見ては感動している。私の出身小学校の校歌にも「那智の滝」という言葉が出てくる。それほど身近に感じている。私たち地元住民は、この滝がとても大好きである。

那智勝浦町には、もう一つ水に大きく関係するものがある。朝早くに漁港に行くと、たくさんさんのマグロが並んでいる。そう、那智勝浦町の漁港は「日本有数のマグロ水揚げ漁港」として有名である。船からどんどん降ろされてくるマグロ、もの凄いスピードで競り合っている人々の姿、いち早く運ぶためにたくさん動いている機械。朝早く起きてでも見に行く価値のある光景である。今年、この漁港で過去最大の四四六キロのマグロが水揚げされ、多くのニュースで取り上げられた。毎年漁港で開かれる「マグロ祭り」では、たくさんさんの観光客や地元住民が無料で振舞われる刺身やマグロ汁を口いっぱい頬張る。他にも、マグロの加工食品やマグロを使った料理、体験型のせりなどが行われる。度々ニュースで報道されているため、画面越しにでも見たことがある人ものではないだろうか。

那智勝浦町は、観光業や商業にたくさんさんの水が関わっている。人々を幸せにし、「来て良かった」や「ここに住んで良かった」という印象を持たせている。だが、幸せなどのプラス面だけではない。水は、時に人の命

を消す力を持つ。

二〇一一年、九月三日の夜中。消防団に所属しているおじいちゃんが家に来た。

「大雨のせいで那智川が氾濫してる!! 早く逃げやな巻き込まれる! じいちゃんの家へ避難して! こんな台風やと思ってた。」そう言って、別の人達に危険を知らせに行ってしまった。私たちはすぐ準備しておじいちゃんの家へ向かった。おじいちゃんの家にはたくさんさんのご近所さんがいた。

そこで一晚を過ごし、明るくなった頃にご近所さんを連れて避難所に行った。福祉保健センターへ私たちは避難したから、周りには小さい子や赤ちゃん、お年寄りばかりだった。小学生だった私は、小さい子のお世話や周りのお年寄りとの会話で心をいやしていた。小さかった弟やいとこ達にとつて、騒げない、好きなものが食べられない、お風呂に入れないの三拍子はとても辛かったと思う。そこで何日も生活し、家に帰る最中の周りの景色は、今でもしっかりと頭に残っている。流木が突き刺さった小学校の校舎、にごった川の水、優しくしてくれていたお年寄りのポロポロになった家。

この水害で、私はたくさんさんのものを失った。通っていた小学校や大切にしていた秘密基地、それに同級生一家まで。そのショックはとても大きかった。

私たちは、水が無いと生きていけない。今、滝やマグロがあるのは、全て水のお陰である。だが、水は時として、尊い命をもうばってしまう。水害後、ダム建設をはじめとした防災対策が次々と行われている。私たちは、水とかしこく付き合っていく方法を見直さなければいけないと思う。と同時に、生活させてくださり、私たちに素晴らしい景色や産業を残してくれる水に感謝していこうと私は思う。

## 「水」の悪夢、そして希望

和歌山県立田辺中学校 二年 倉山 未羽

巨木の根が大地から現れ、太い幹がいつも簡単になぎ倒されていく。その後からも滝のような水が土砂と共に流れ落ち、民家に襲いかかる。

平成二十三年、八月三十日。

和歌山県の県南部を中心に悪魔のような激しい雨が襲った。台風十二号だ。

観測地点十八ヶ所のうち十四ヶ所が七十二時間雨量の観測史上最高値を記録するほどの記録的大雨だった。

これにより、命を奪われてしまった人は五十六名にも及んだ。

私はこの当時、八才。小学二年生という幼さではあったが、この水害のことはよく覚えている。

なぜなら、私の祖父母の家が被害にあったからだ。

深夜遅くに家の電話が鳴った。

祖母からだった。

祖母は私の母に「家の中が水浸しになっているけど真っ暗でよくわからない。けど今は危険だから、台風がすぎたらすぐに来てほしい」と伝えた。

私はこの時、心の底からじわじわと真っ黒なインクのように広がっていた不安を今でも覚えている。

様子を見に行きたくても行けない、自分の無力さに涙まで出てきた。

それほどに、衝撃を受けた出来事だったのである。

そして、台風がすぎ去ってから祖父母の家を見に行った。

そこにあったのは私の知らない祖父母の家だった。

床の木は朽ち果て、土砂がそこらじゅうにぬりたくられ、所々に大きな鉄の棒のような流されてきた重そうなものがある。また、私が植えたどんぐりの木も跡かたもなくなってしまうていた。

私は何も言わずにしばらくただ漠然と立っていた。いや、きっと言えなかったのだろう。

今までの思い出が全て水と共にどこかへ流されていったかのように思え、とてもつらかった。

そして、その頃から思い出の場所を守るためにも、どのような対策ができるかを考えるようになってきた。

まず、「命」を守るためには、避難場所の確認と逃げ道を確認することが必要だろう。

そして、そこから地域の自治体等が川がある場所等に堤防をつくるなど、積極的に活動することが大切だと思う。

このように、「水」というものには良い点が多くあるだけ、危険な点も沢山ある。

だが、この地球にいる以上、私たちは「水」と付き合いしていくしかないのである。

だから、水についてよく理解し、上手く利用していくことが大切だと思う。

十四才の今。

自然と生きるためにどうしようか。

悩むべき大きな課題である。

## 生命の水

開智中学校 一年 谷口 寛汰  
たにくち かんた

昨年の夏に古座川にキャンプに行きました。とてもきれいな水で、川の底の石までもはつきりと見える美しさです。川の魚もとても気持ちよさそうに泳いでいるように見えました。

一方、少し前に和歌川の橋を渡った時に、思わず息を止めてしまうようなくさい臭いが川からしました。川を見てみましたが、川の底の石は到底見る事が出来ず、目にとびこんできたのは、ごみのようなものでした。

お父さんやお母さんが子供の頃は、この川はきれいだったのかな。おじいちゃん、おばあちゃんが子供だった頃は、もっともつときれいで、古座川で見たようなきれいな水が流れている川だったのかなーとふと思いました。

水はとても大切です。今、僕が住んでいるところでは、水道のじゃ口をひねれば、いつでもきれいなお水がいくらでも当たり前のように出てきます。僕は、それが当たり前すぎて、きれいなお水がいくらでも出てくる事をありがたいたと思った事なんてありませんでした。

ある日の事、僕が弟とお風呂に入っていた時、シャワーの水量を全開にしながら、長い時間ふざけあって遊んでいた事がありました。その時に、この話を聞きました。

僕の両親は僕が産まれる前に、お父さんの仕事の関係でいろんな外国で暮らしていたそうです。発展途上国のいなか町で暮らしていた時は、水道のじゃ口をひねって出てくる水は、茶色のお水。お風呂のシャワーの水で頭を洗うと、砂がまじっているのかジャリジャリという音がしたそうです。

洗たくをこの水ですると白いタオルや服などは洗っているのに茶色くなくてしまうそうです。この水道のお水もしょっちゅう何の前ぶれもなく急に止まったりすることがあったそうです。

僕は、この話を聞いた時に、「ハハハハハハハ」と笑ってしまった事を思い出しました。

きれいなお水がいくらでも出てくるのが当たり前と思っていた僕は、飲んでもおいしいきれいな水が水道のじゃ口をひねれば出てくる事のありがたさに気付いていませんでした。

きれいなお水より、汚いお水が好きという人は誰もいないと思います。きれいな川や海が良いという事は、小さい子でも思っているはずです。海や川で泳いでいる魚達もきれいな水が好きはずです。それなのに、海や川の水は汚れてしまっています。少しずつの積み重ねで汚染されてきてしまったのだろうか…。

現在では、素晴らしい下水処理の施設が整い改善されてきているという話を聞いた事があります。とてもうれしいニュースです。

少しずつでも、きれいになっていくと、いつの日か皆が思わず大きく深呼吸して、吸いこみたくなるようなきれいな海や川になるのかなあ。一度、汚染された水をきれいにするのは、簡単な事ではなく、元通りになるのは難しい事なのかもしれない。それでも、僕たちは、努力をしなくては思いました。

この作文を書きながら、「水」の語源の由来を調べました。

いろいろな語源があり、正確な語源は未詳ですが、僕は生命を繋げるものであることから、「み」が「身」のことで、「生命」を意味し、「ず」は「繋げる」を意味するといった説が気になりました。

僕たち人間、動物、生物、植物も全て、水がないと生きていけない。生命を繋げる大切な水。

きれいな水を守らなければいけない。

## 水と正面から向き合う

和歌山県立向陽中学校 二年 津村 つむら 忠明 ただあき

二〇一三年、私たちが小学四年生だった年の夏のことでした。十分な雨が何十日と降らなかった高知県では、早明浦ダム貯水率が二十四%まで下がるという深刻な問題を抱えていました。その時私は、香川県高松市に住んでいて、ちょうど香川県についていると学んでいたため、どういふことがあったのかすぐ理解することができました。香川県は徳島県との県境が山で、斜面が急になっているのにもかかわらず、形は横長で山からの水はすぐに海に流れ出してしまおうという所でした。そのため、高知県にある早明浦ダムなどから、生活用水は支給されていました。しかし、そのダムの水がなくなるうとしており、もう少しで香川県への支給を停止されるところだったのです。当時新聞にも載せられて、載っていた写真に映っていた早明浦ダムの干上がった姿は、いかにも衝撃的で、今でも記憶に残っている程です。テレビで毎日知らされる貯水率が日に日に下がっていくのを見て、私はとにかく焦りを感じました。水不足という言葉は耳にしたことはありましたが、現実とは掛け離れた世界のようにしか思っています。その世界を目の当たりにしていたのですから、何かできることはないか、いろいろと考えました。節水はもちろんのこと、家族にも協力してもらおうようにして、何とかその難を乗り越えようと頑張りました。それから何日かたったある日、台風に近い大雨になり、貯水率は一気に九十%まで上がりました。あの時の焦りは何だったのだろうと思う程、何事もな

かったようにあっさりと元に戻ってくれました。その事を知った時の安心感は言葉に表すことができませんでした。

「水は限りある資源だ。」

あの出来事を通して私が感じたことです。水は資源だということは、何となくでしか感じたことがなく、むしろ水は、当たり前にあるものと感じていました。しかし、雨という源がなければ使っていくと私たちが使うことができない水はなくなっていくという簡単なことに気づかされました。そして、水は私たちに恵みを与えてくれると共に、限りある資源として心の辞書に深く刻まれました。私はそのような水を当たり前のように使うことができるありがたみを忘れず心に置き、節水を心がけようと思ったのです。

私は今までたくさん出来事を通して、水にはいろいろな素顔が隠れていることに気づかされました。恵み、資源、恐しい、素直など、本当にたくさんあります。その中で私が重視したいのは、水は資源であるということです。私の経験から、私たちが使うことのできる水は限られてきます。そうでもなければ、水不足になるはずがないのです。では、この水という資源をどうすれば守ることができるのか、それは節水です。一人が減らす水の量はごくわずかですが、何億という単位の数が集まると莫大な量になります。そして、そのたくさんのお水がダムなどの水の減少の割合を小さくすることができません。それだけでなく、生活排水を元のきれいな状態にするための水が増えるということにもつながります。節水は動物にはできません。私たちが人間しかすることができないのです。水という資源、生き物の命を守るために、節水をみんなにすすめたいと思います。まずは四年前の私の体験を周りの友達に知ってもらうことから始めようと思います。

## 水が私たちに与えてくれるもの

近畿大学附属和歌山中学校 三年 富安 南名 とみやす なな

「やっぱり、お家のご飯はおいしいね。」私の家では、食事をしている時よくそんな会話がでています。

私の家では、兼業農家のおじいちゃんが作るお米を食べています。学校が休みの日には、私もおじいちゃんの家に行き、お米作りを手伝いにいたりしています。お米作りは、お米の元となる粃を蒔いて稲の苗を作り、その稲の苗を田んぼに植えて稲を育て実ったお米を収穫します。その稲の種蒔きや田植え、稲刈りなどを微力ながら手伝っています。その中で私が感じたのは、稲は水に浸かっている時期がほとんどで、お米作りには水がとても大切だということでした。特に、田植えの時に、おじいちゃんから「お米作りは水が大事なんだ。」田植えの後、稲は水が無いと育たない。「田んぼの水をさらせたら稲が枯れてしまう。だから、田んぼの水の管理がお米作りには一番大切なんだ。」と教えてもらいました。確かに稲は水稲というほど水がないと育たない植物で、田んぼの水をさらせてしまうと稲が枯れてしまいお米が収穫できません。水がないと、いつもおいしく食べられているおじいちゃんのお米が食べられなくなってしまうことになりません。

お米に限らず、野菜や果物などを作る際にも水は大切で、水がなければ植物は何も育ちません。そうなる野菜や果物の数が減り値段が高くなつて、野菜や果物が食べられなくなってしまうです。ですから、農業をする方々には水が必要不可欠です。その他にも、よく考えてみると、漁業では、海がないと魚は生きられず漁ができません。また、工場では、物を製造したり洗浄したりするには必ず水が必要です。もちろん私達の生活にも水は必要です。私達が生きていく上で必要な料理や洗濯、掃除などあらゆる

場面で水が関わっています。水がなければ私達の生活が成り立ちません。今回、この作文を書くにあたって、水について考え直してみました。すると、水は私達の生活にも大きく関わっていて、私達が水から与えられているものは非常に多いことが分かりました。

和歌山県には海があり、川もたくさんあります。和歌山県は、本当に資源が豊富な県です。この大切な資源である水を守り、これからもずっと残していくことこそが、私達がやらなくてはいけない事だと感じます。私はこれからもずっとおじいちゃんを作るおいしいお米を食べたいと思っています。

そのためにも、和歌山県の水資源をずっときれいなままでいられるよう、これからも水を大切にしていく取り組みを、自分が出れる身近なことから一つずつ挑戦していきたいと思っています。

## きれいにしたいという思い

和歌山県立向陽中学校 二年 中裕 心優

なかきこ みゆ

私は小学生の頃、有田に住む祖母のところへ毎年足を運びました。夏休み中であれば、そこに流れる川へ泳ぎに出かけます。有田に流れる川は、にがりがなくきれいに透き通っていて、気持ちよく泳げました。そして、毎年、たくさんの自然に囲まれた山のなかで開放感を味わいながら過ごしました。

一方、有田の川とは反対に、私の家の近くにある和田川はすごくにごって泳げる状態ではありません。私は川をきれいにしたいと思うと同時に、一度汚れてしまった川はもう一度透き通ったきれいな川になるのかと、疑問に感じました。

そう思っていたある日、水についての授業が行われました。近くの川の水、水道水、カルピスを少量まぜた水では、カルピスを少量まぜた水が一番汚いことを、初めに葉を使って違いを見せてもらいました。そこから、先生は「洗面所などに少しでも飲み残しのジュースなどを流すと、周りの川や用水路はすごく汚くなるんだよ。」と言いました。その話を聞いて、他にも日常生活の中で水を汚くする行動をしてしまっていないか考えると、たくさんありました。洗濯や、食べ終わった後のお皿洗い、トイレなどです。対処法は、洗う前に油などの汚れをいらない紙でふき取る、洗剤はなるべく少なくする、トイレトペーパーは長く取りすぎない、ということをお教へてもらいました。私にも簡単にできることだったので、川をきれいにするということがより私の中で現実的になってうれしかったです。

しかしそこで、また疑問が浮かびました。取り切れない汚れはどうなるのかということです。「それは浄水場できれいな水にするんだよ。だからと

いつて汚くても大丈夫じゃなくて、全ての汚れをとれるわけじゃないから、自分達でもできるだけきれいにしておく必要がある。」と言ってくれました。浄水場があつて安心、ではないのだと思いました。その後、実際に水をきれいにして農家さんに話を聞きました。田んぼに使う用水路の水が汚かったことから、そこに「えひめA1」を流しているそうです。「えひめA1」とは、納豆菌、イースト菌、乳酸菌を発酵させたもので、微生物の力で水をきれいにするのだそうです。水道に流せば、川などの水をきれいにするこへつながつていくことも聞きました。

私はこの授業で話を聞いて、農家さんも自分自身でできることを考え、水をきれいにする活動を行っていることを知り、私も身近にできることから始めていこうと思いました。しかし、私一人が始めてもきれいになるのはほんのちよつとです。一人一人、みんなが水をきれいに行動していくことで、やつと水はきれいになっていくのだと思います。水は、ほんの少し自分自身の行動を変えるだけできれいになるのだということを、もつとたくさんの人に知ってもらい、行動に移してほしいです。例えば、私が授業で教わつた、トイレトペーパーを長く取りすぎないというこを実行していくことです。そして、私がよく泳ぐあの透き通つた川に少しでも近付いてほしいと思うとともに、そのきれいな川もそのままであつてほしいと願います。私の子供、その子供の時代でも、水がきれいなままであつてほしいです。そのためにも、後世の人々には、水をきれいにしたい、きれいにし続けたらという思いを持つてほしいと思いました。

## あの日見た景色から

和歌山県立向陽中学校 二年

西谷

美咲

「わあ、きれい！」

「ザバーザバー。リイーリイーリイー。」

川の流れる音、虫の鳴き声。天の川のようにきれいな小さな無数の光が、私を見つめている。自然と調和して。初めてホタルを見たあの時の感動は、八年たった今でも忘れられません。私の住んでいる紀美野町には、貴志川が流れています。私は、その貴志川の上流でホタルを見ました。ホタルは、水のきれいな川しか住んでいません。なぜなら、ホタルの幼虫のえさとなっているカワニナという貝は、きれいな川にしか住んでいないからです。

また、きれいな川を維持するために、たくさんの人々が、協力していることを知りました。下水処理場で働いている人、川を清掃するボランティアの方々、川をきれいにするために協力している水源地域の人々。

ホタルだけではなく、水は私たち人間にも大切な存在です。私が特に水のありがたみを感じたのは、断水の時です。家の近くの水道管が壊れて、水が来なくなりました。日曜日の朝起きると、水が蛇口から出ませんでした。当然、トイレや歯みがきもできませんでした。私は、トイレに行くことを我慢できずに泣いてしまいました。その水道管も半日あれば元通りに戻り、水が使えるようになりました。その後、再び水を使うことができるようになる、水の重要さを身にしみて感じる事ができました。

今、私は陸上部に所属しています。走る時に、必ず水分はかせません。人間の体の約六〇パーセントが水できています。体内の水分の二パーセ

ントが失われると運動能力が低下すると言われていきます。今、私が厳しい練習に耐えられているのは、水のおかげだと言っても過言ではありません。しかし、世界には安全できれいな水を飲めない人がたくさんいます。外国の日本人学校に勤めていたことのある先生が、「日本ほど水道水がきれいで、飲んでもお腹を壊さないような国は他にない。」と言っていました。日本では、蛇口を開けばきれいな水が出てくるのに、世界には水不足や不衛生な水を飲んで死んでいく子どもたちがたくさんいます。私は「水が豊かなこの日本に生まれて幸せだな」と思いました。

このように日本は、水に恵まれていて、水不足になることはありません。しかし、日本ではたくさん地震が起きます。水道が止まって、断水にもなります。ずっと当たり前と思って飲んでいたきれいな水も飲めなくなるかもしれません。私は、万が一の時の対策として、水や食料などを備蓄しておく必要があると思います。また、二〇一一年の東日本大震災では、津波によってたくさんの方が命を奪われてしまいました。水は、時に人や動物などの命を奪うこともあるのです。水は恐ろしいものなのです。地震が来ると、水不足になったり、津波が発生したりするのは仕方ありません。だから、その前に普段から対策しておくことが大切だと思います。

きれいな水を守るために、私たちができること。それは「節水」することだと思えます。トイレを「小」にして流したり、蛇口をこまめに閉めたりして、なるべく水を使わないようにすることが大切です。また、排水に油や食べかすなどを流さないようにして、きれいな川を守りたいです。機会があれば、川の清掃などのボランティア活動にも積極的に参加してみたいと思います。

きれいな水、私が見たホタルの風景。それらを後世に残していけるように、家や学校で身近なことから取り組んでいきたいです。

## 家族との「節水大作戦」

近畿大学附属和歌山中学校

二年

濱野

悠奈

はまの ゆうな

私は小学生の頃、夏休みの宿題でエコや節水について考えたことがある。その頃はまだよくわからず、宿題だからしなければならぬ、という思いで取り組んでいた。小学生の頃から、私はよくシャワーを出しっぱなしにしたり、必要以上の量の水を使ったりなどとても無駄なことをしていた。

中学一年生の半ば頃、私は初めて意識して水不足のニュースを見たり、新聞の記事を見たりした。こんなにもたくさん場所の水不足が起こっているのに、私はあんなにも自由に使うことを無駄ばかりしていた。そう思うと急に後ろめたくなった。私は母に思ったことを伝え、改善策を聞いてみた。すると母は、小学生の頃やったように、気をつけることを紙に書いて、例えばトイレや洗面所に貼って見たらどうか、と教えてくれた。こうして私たち家族の、「節水大作戦」が開始した。

まずは紙づくり。父、母、私の家族全員で協力しあって作った。気をつけるべきことを考えてみると、たくさん案があがった。それを目立つように、大きい文字でイラストをつけたりした。家族と作り、考えることで節水についての考えが深まる上に、家族全員で話すことのできる環境もできる。次に、その紙をトイレ、洗面所やキッチン、お風呂のドアや洗濯機など、多くのところに貼りつけた。全ての紙を貼り終え、辺りを見たとき、なんだかとてもすがすがしい気持ちになった。さっそく次の日から本格的に「節水大作戦」が始まった。実際に気を配ってみるととても大変で、最

初の頃はつい水止め忘れてしまったりした。そこで私は一つの提案をした。紙に書いておくことをしなかったり、忘れていたときはそのことをメモ帳に書き留めておくことだ。父も母も賛成してくれた。この計画は、作戦を始めてから一週間経って開始された。

現在もその活動は続いていて、家のいたるところに注意点が書かれた紙が貼られている。今でもニュースの特集などで水不足の場所の状況や人々の暮らしを目にする。ニュースを意識して見るようになるまで、私は何も知らずにいた。こんなにも大変な状況の場所があるのに、家族内での水の無駄使いでさえも素知らぬ顔をして毎日を過ごしていたのだ。

私たちもいつそのような状況になるかわからない。だから、小さなことでもコツコツと取り組んでいけばよいと思う。紙を貼ったり、家族間でも注意しあったり、どんな小さなことでもそれを皆がやって積み重なれば多くのことが変わるはずだ。また、自分から知ろうとすることもとても重要だと思った。知らないことがあつたら調べたりして知る。それだけでまた、何かが変わりますかもしれない。そう考えると色々なことが楽しくなるし、改善されることが増えるはずだ。私は今ももっと様々なことが知りたいと思う。いつか水不足の改善などに関わってみたい。この活動で私は、水の貴重さと大切さ、そして知ることの大切さ、協力しあい自分でも考えてみることの大切さを学ぶことができた。

## 曲川の恩恵

田辺市立本宮中学校 二年 松井 深山 まつい みやま

深山に降った数多の滴は、いつしか集まり、小さな小さな谷になりました。そして、幾度も岩にあたりほとぼしり、幾度も曲がり、水かさを増して僕の家を通ります。

この川の名は曲川といいます。曲川の水の流れる音が、僕の家からはいつも聞こえます。常に僕の家族のそばにいてくれる曲川には、清く美しい水が流れ、そこで沢山の魚たちが戯れ、沢山の鳥たちが集まってきました。この川の水のお陰で、僕の家族は生活が出来ています。その曲川の水の恩恵を書き、身近なことから水の大切さを訴えていきます。

僕の家は農家です。農家にとって常に余るほどの農業用の水がある環境は、非常に手に入れたいものです。その環境を僕の家は、曲川のお陰で持っています。曲川から絶えず多くの水が水路に流れ入ってきます。勢いはすこく強く、足を水路の水に入れたなら、立っていられないほどです。また、小石を水路へ落としたなら、それは矢の如く流れていきます。勢いは甚だしく、十二分過ぎるほどの水が水路には流れています。この水で、農作物に水をやり、田んぼに水を張り稲はすくすくと育ちます。曲川の水のお陰で、美味しい野菜やお米が作れ、僕の家は暮らしを立てることが出来ているのです。また、作った作物は自分たちでも食べます。そのため、僕の家族の体は曲川の水によって、成り立っているのです。しかし、あたり前ですが水によって成り立っているのは、僕の家族に限ったことではありません。全ての人がいえることです。なぜなら、植物は全て水によって出来ており、それを人間は食べるので、人間もまた水によって出来ているということになるからです。

次に曲川からの頂き物について書きます。夏になると僕の兄は、曲川に一日中行っています。そこで魚捕りをしているのです。兄のその熱中ぶりには、ご飯を食べに帰って来るのも忘れるほどです。曲川には実に多くの魚が戯れています。アユ、アメノウオ、アマゴ、ウナギ……などです。また、サツキマスという全国的にも珍しい魚もいます。このように沢山の種類の魚が曲川にいるのは、流れる水が非常に清く美しいからです。そのお陰で、兄は魚捕りという楽しみができ、僕の家族は兄の捕った魚を食べることにより、健康に生活が出来ているのです。その曲川の水の恩恵に報いるために水を決して汚すことのないようにしなければなりません。

最後に僕と水との関わりについて書きます。僕は毎日に感謝しながら過ごしています。しかし、昔からそうだった訳ではありません。小学校2年生の時、平成最大級の台風といわれる紀伊半島豪雨により、僕の家は浸水しました。家は住み続けられる状態ではなかったため、生まれ育った地域を離れ、引っ越ししました。あの時、どれほど水を憎んだでしょう。川さえなければ、雨さえなければ、水さえなければ……と思いました。

引っ越し先には曲川という美しい川がありました。それを見た時、水は人に甚大な被害をもたらすこともあるけれど、普段の川は、水は、こんなにも美しいものだとなりました。その後、悲しいこと、つらいことがあれば、いつも曲川を見に行きました。すると、不思議と心が落ち着いてくるのです。

この様に、曲川の水は多くの恩恵を与えてくれます。僕の家は、水によって生計を立て、水によって食事をし、水によって健康でいられ、水によって心が平安でいられるのです。そのような水の恩恵に感謝し、恩恵を報いるために、水を大切にし、決して汚さないと、ここに誓います。

## コウノトリが教えてくれたこと

和歌山県立向陽中学校 二年 三嶋 瞭秀

みしま あきひで

私が住む町、和歌山市には時々コウノトリがやってくる。コウノトリは、昔、日本では絶滅したそうさ。なぜコウノトリは絶滅したのか、なぜ再びコウノトリは増え、和歌山にやってくるようになったのか。私はそこに注目し調べてみることにした。すると、その物語には、今の私たちが忘れかけていた、大切なメッセージが隠されていた。

兵庫県豊岡市は、円山川の恵みをうけ、稲作が盛んな地域だ。戦争中、日本では、たくさんのお米が田んぼにまかれ、水が汚れ、コウノトリのエサとなる、ドジョウ、トノサマガエル、バッタなどが減った。そのため、コウノトリも、どんどんと減っていき、一九七一年には、野生のコウノトリが絶滅してしまっただろう。そして、豊岡市の飼育施設の二羽を残すのみとなってしまった。しかし、一九八九年、人間のせいで絶滅してしまっただコウノトリを人間の手で再び豊岡の空へ、とがんばってきた飼育員さんの努力がついに実った。一九八五年に、ロシアからやってきたコウノトリとの間に、卵が生まれ、ヒナが誕生したのである。さらに、翌年からは次々とヒナが生まれ、やがて、施設で暮らすコウノトリは百羽を超えた。そこで、飼育員さんたちは、目標である、豊岡の空への放鳥のために準備を始めた。外の世界を知らないコウノトリのために訓練を行い、二〇〇五年、五羽のコウノトリが、豊岡の空へと飛び出した。これと同時に、農家の人も、農業を使わない農業を行うようになった。その結果、野生としての卵が生まれ、四十六年ぶりにコウノトリが巣立った。豊岡の人々は、今も、水とコウノトリを守る農業を続けている。

この物語から、私は二つのことを学んだ。それは、水をきれいにすること

とができること、そして、人々の努力で水をきれいに保つことができるということだ。水が汚れ、コウノトリが減っていったが、水をきれいにする努力をしたことで、コウノトリが、空を飛ぶ姿を見ることがそれを示していると思う。しかし、コウノトリを増やすことに本当に努力した人々がいたことが、一度汚すと全て元どおりにすることは難しいと伝えていると思う。

水は私たち生物にとって大切なものである。私たちは、川の水を使っている、川や海の魚を食べている。食物連鎖のピラミッドの、頂上にいる私たちは、ほとんどと汚れがたまったエサを食べていることになる。例えば、私たちが、大好きなマグロも、小魚を食べ、その小魚も、プランクトンを食べている。だから、もし水が汚れていると、小魚が汚染されたプランクトンを食べ、マグロはプランクトンと水に汚染された小魚を食べ、私たちは、小魚とプランクトンと水に汚染された、マグロを食べることになる。

だから、私たちは水をきれいに保つことが、大切である。そのために、私たちができることを気をつけたい。例えば、油は、新聞紙にすわせて、燃えるゴミとして出す。米のとき汁も、植物に与え、水といっしょに流さない。洗剤や石けんは目分量ではなく、きちんと量る。その努力が大切だと思う。

ニホンザリガニ、ホタル、オオサンショウウオ。これらの生物は、今ほとんど数が減って行って、絶滅へと追いこまれている生物たちだ。これらの生物たちは、きれいな水がないと生きられない。コウノトリのような生物たちをもう二度と作ってはならない。それぞれの努力で、その生物、また私たちの未来が変わる。きれいな水をずっと残すために、これからも努力していきたい。

## 第39回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

第41回「水の週間」の行事の一環として実施された作文コンクールの概要は、次のとおりです。

### 1 応募要領

- ①テーマ・・・「水について考える」（題名は自由）
- ②対象・・・中学生（中学生と同じ年齢の方を含む。）
- ③原稿枚数・・・400字詰め原稿用紙4枚以内、日本語で表記された個人作品に限る。  
題名・学校名・学年・氏名（ふりがな）を記入する。
- ④あて先・・・和歌山県庁 地域政策課  
〒640-8585 和歌山市小松原通1-1  
TEL 073(441)2423
- ⑤応募期間・・・平成29年5月9日締切り
- ⑥版权等・・・○応募作文は自作の未発表のものに限る。  
○応募作品の著作権は、主催者に帰属する。  
○応募作文の返却は行わない。

### 2 応募結果

応募 学校数	応募 総数	学年別		
		1年	2年	3年
校	編	編	編	編
15	1,088	547	321	220

### 3 審査

和歌山県審査において、優秀賞3編、入選5編、佳作10編あわせて18編の入賞作文を決定。

（協力 和歌山市中学校国語教育研究会）

### 4 表彰

#### （1）賞および賞品

賞	賞品
優秀賞	賞状、図書カード
入選	賞状、図書カード
佳作	賞状、図書カード

#### （2）表彰式

優秀賞の受賞者を平成29年7月27日、和歌山県庁において表彰

# 水を探そう

mizunohi.jp

## 水の日・水の週間関連行事

- 1 水を考えるつどい(8月1日開催)**  
作文コンクール表彰式や専門家・著名人による講演など。
- 2 水のワークショップ・展示会**  
小学生の親子を対象としたイベント。夏休みの宿題にも役立つ!
- 3 水とのふれあいフォトコンテスト**  
様々な「水」をテーマに、ソーシャルネットワークからも参加できます。
- 4 全日本中学生 水の作文コンクール**  
次代を担う中学生を対象に「水について考える」をテーマに実施。
- 5 水の週間一斉打ち水大作戦**  
賛同いただける団体によって、日時指定の打ち水を実施。

この他、水資源功績者表彰や各都道府県等が実施する水の週間関連行事などが行われます。

第41回

# 8/1は水の日

## 8/1~7は水の週間



健全な水循環により、水の恵みを楽しむ社会を目指して。

主催：水循環政策本部、東京都、水の週間実行委員会 ほか  
後援：文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省 ほか

「水の日・水の週間」に関する行事等の情報は、官邸ホームページ、国土交通省ホームページもしくは水の日・水の週間ホームページ(mizunohi.jp)をご覧ください。

水の日水の週間

検索

2017年度ミス日本「水の天使」宮崎あずさ